

子ども同士の間人間関係を育むには

—学級通信の実践を通じて—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 森原将貴

1. 問題の背景と目的

子ども達にとって良い学級とはなんだろうか。河村(2010)は「望ましい学級集団の要素」の一つに「集団内の子ども同士の良好な人間関係、役割交流だけではなく、感情交流や内面的なかかわりを含んだ親和的な人間関係」を挙げている。親和的な人間関係とは、「相互の利害関係を超えて、家族関係に近いレベルでつながっているため、子ども同士が支え合いの関係になり、その網の目が全体に広がっている」ことにより「1人の子どもの困難さや辛さが周りの子どもたちに共感されやすく、学級内のいろいろな子どもたちや学級全体からサポートを受ける」ことができること、すなわち「目標や行動を共有しているだけではなく、感情的にも結びついている」関係であると、河村は説明している。よって教師は、子ども同士が内面的・感情的に深くかかわるような人間関係を育むことができるような働きかけを行うことが重要であると考えられた。

そこで筆者は、教師が行う、子ども同士の親和的な人間関係を育む実践手法とは何かを検討した。筆者は、学部の卒業論文で日記指導に関する研究を行った。津田(1996)は、人間関係を育むため日記指導を用いて学級内に「縦の糸」と「横の糸」の二つの糸を結ぼうとした。

「縦の糸」とは、主に子どもたちの書いてきた日記に赤ペンを入れて交流をすることで築かれる、子どもと教師の関係である。例えば津田(2000)が一年間、4年生の大志君の日記に赤ペンを入れ続けた実践「大志の日記と赤ペン指導」では、日を追うごとに津田と大志君の信頼関係が構築されていった。

「横の糸」とは、子ども間関係のことである。子どもたちの日記を学級通信に掲載し学級内で読み合う。そのことで子どもたちがお互い

の知らなかった一面に気付いたり、知らなかった内面を知ったことで関わりに変化が生まれたり、子ども間の認め合いや育ち合いが行われ、学級の子どもの間の人間関係が育っていった。

津田の他にも、学級通信を通じて子ども同士の「横の糸」を結ぼうとした実践事例がある。例えば、笠原(1981)は、落ち着いた一助君と物静かな有理さんと、普段の関わりに加えて日記指導による赤ペンで交流した。学級通信を通じて彼らの内面が伝えられ、子ども同士で学び合い育ち合いが生まれていく様子が書かれている。

筆者はこの「横の糸」に着目した。また小坂・赤坂(2017)も、学級通信の役割「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」に加えて「子ども同士の人間関係」構築を促進する可能性が示唆されていた。子ども同士の親和的な人間関係を育む実践手法の1つとして、担任による学級通信の発行が考えられた。

しかし現在、子どもの日記を掲載する学級通信の発行は、記載内容への配慮が必要となり、困難になっている。霜村(2018)は、管理職のハンコが必要な点や教師個人の思いなどをカットされる不自由さによって「学級通信が出しづらくなっている」と指摘した。霜村の指摘は、学級通信の記載内容に、学校によっては制約があることを示唆していた。ならば、学級通信を発行している現場教師は、学級通信を用いて「子ども同士の親和的な人間関係」を育むために、どのような実践や工夫をしているか、直接聞き取る必要もある。

本研究では、学級通信の発行を通して子ども同士の人間関係を育むことを追究することにした。研究方法として、最初に学級通信に関

する文献調査を行った。これらを踏まえて、実習配属校において学級通信の発行を行い、子どもたちの様子を参与観察した。さらに、学級通信を発行した経験のある現場教師を対象としたインタビュー調査を実施した。

2. 学級通信に関する先行研究

理想教育財団(2018)の調査では、小学校で学級通信を発行している教員は77%、以前発行していた(今は発行していない)は6%であり、あわせて発行経験のある小学校教員は83%であった。このことから、小学校において、学級通信を発行している教師や、学級通信を発行した経験がある教師は多くいることがわかる。また、小学校管理職を対象とした同調査では「担任だった頃、学級通信を発行していたか」という問いに対して「積極的に発行」「ときどき発行」と答えた管理職は95%であり、管理職の多数に学級通信の発行経験があった。

さらに同調査では、学級通信の発行意義についても質問している。「学級通信は発行したほうがよいと思うか」という質問項目の回答結果は、発行したほうがよいと答えた小学校教員は92%であった。この結果から、多くの小学校教員は発行する意義を感じるため学級通信を発行していると考えられた。また先述の発行経験のある小学校教員83%とは9%の差があり、発行した経験が無い教員も学級通信の意義を感じていたことがわかる。以上の結果により、小学校では学級通信は現在でも学級経営に用いられており、またその意義が認知されていた。

鈴木(2012)は学級通信の学級経営における役割を小学校教師に調査した。鈴木の結果では、教師が学級通信を発行する目的として全員が「保護者との連携を図る」を挙げ、また「子どもとの信頼関係」「学級経営の充実」「教師の資質向上」は、それぞれ67%であった。また、教師が「学級通信を発行してよかった」と思うのは上位順に①教師自身の成長②保護者からの反響③子どもの成長④同僚への成長⑤達成感(④と⑤は同位)であった。発行の目的と、発

行してよかったと思う点が、保護者との連携を図るための学級通信発行であるという点において重なっていることが分かった。そして、学級通信を発行するうえで学級経営や子どもと教師の信頼関係の構築も意識されていた。他に、佐藤(2020)や理想教育財団(2018)などの結果でも、鈴木(2012)と同様の傾向の結果であった。

以上の例の他にも、学級通信に関する先行研究や実践例が多くあった。筆者は、佐藤(2020)の「学級通信発行の目的の分類」を参考にし、調査した文献にあった学級通信の発行目的を図1のように分類した。「保護者への情報提供」「学級の連絡」「学級づくりの一環」「子どもとの関係づくり」「文集がわり(作文紹介)」「教師の資質向上のため」とし、通信を発行するにあたり想定している対象者ごとにA～Dの記号を用いて6タイプに分類した。

A	保護者への情報提供	(教師→保護者)
A'	学級の連絡	(教師→保護者・子ども)
B	子どもとの関係づくり	(教師→子ども)
C	学級づくりの一環	(教師→子ども→子ども)
C'	文集がわり(作文紹介)	(教師→子ども→子ども・保護者)
D	教師の資質向上のため	(教師→教師(自分・同僚))

図1 学級通信の対象別タイプ

このように整理を行うと、子ども同士の親和的な人間関係を育むためには、子ども同士が繋がるきっかけとなるCとC'に着目する必要があると考えられた。

CとC'に着目した先行研究について、例えば小坂・赤坂(2017)は小学校にて児童の良いところを紹介する学級通信の実践を行っている。学級通信で紹介された良い行動が他の児童に模倣されたことや、仲間のことをもっと知りたいというニーズをもつ児童が過半数以上となったことが明らかにされ、学級通信により子ども同士の人間関係にも良い関係が表れるようになった。また学級通信を通じて行動の変容があったことで、学級を良くするために行動しようとする児童が増えていき、協力して行動するなど児童間の関わりが増加し、子ども同士の人間関係が深まった可能性が示唆

されていた。

福井(2018)の実践では、自閉症スペクトラムと診断されたイタル君が安心して学校生活を送れるようにする手立てとして、イタル君の作文を学級通信で取りあげた。学級通信により、学級の子どもたちのイタル君への理解が深まり、同時にイタル君の中に学級の友だちへの安心感と信頼感が育っていく様子が紹介されていた。この実践から、学級通信の掲載内容が子ども同士の相互理解を促進させ、他者への安心感と信頼感を育てる役割を果たす可能性があると考えられた。また、この実践では1年間を通した継続的な発行が行われており、だからこそイタル君に安心感や信頼感が積み重なり、このような成果が得られたと考えられる。先述の笠原の実践と同じく、教師が子どもを丁寧に扱い学級通信に掲載し、子ども同士の人間関係を育もうとした。

このことから、子ども同士の親和的な人間関係を育むための学級通信に必要なことは、児童間の相互理解が深まるような内容であること、子どものよさを訴える内容であること、そして継続的な発行などであると考えられた。これらの文献調査を踏まえて、実習校で学級通信を発行した。

3. 実習校での実践

- (1) 対象校 山梨県内公立小学校
- (2) 期間 2020年9月・10月(計3回)
- (3) 児童 第5学年児童(25名)
- (4) 実施方法

社会科の授業において記述した児童の意見や感想を掲載し、そこに教師(筆者)の思いも加え、学級通信を作成した。

朝の会時に15分時間を取り、配布した。配布後5分は大事だと思う場所に線を引きながら黙読、1号発行時のみ「友だちの意見が学級通信にのっていることについて、どう思いますか」というアンケートを実施した。

(5) 実践の詳細

実習校で既に発行されていた学級通信は、図1の分類ではAタイプまたはA'タイプであ

った。保護者向けの掲載内容となっており、学校での出来事や学習活動の成果を取り上げていた。毎週金曜日朝の会で配布し、児童は目を通さずにそのまま持ち帰ることが多かった。一学年単学級のため、学年通信を兼ねていた。また、クラスの児童らの写真を度々掲載していた。

文献調査から、子ども同士の人間関係を育むには、CタイプやC'タイプの学級通信を発行する必要があると考えられた。また、津田(1996)は日記指導と学級通信への日記掲載を行っていたが、配属校では担任による日記指導が行われていなかった。そこで、筆者が社会科の授業を担当していたため、授業内容に関連した教科通信のような形で、児童のノートやワークシートへの記述を通信に掲載した。教科通信であっても、子どもと子どもの人間関係が育つよう検討して内容を構成した。

(6) 各号の概要と工夫

図2が、発行した学級通信1号である。社会科の授業で扱った内容をふり取りながら、ワークシートに書かれた意見を、四角で囲い取り上げた。配る前に「友だちの意見が載っているよ。5分間読んでみよう」と声を掛けた。この声掛けの意図は、いつもの通信とは違い友だちの意見が載っていることに目を向けさせたかった点にあった。

読ませた後「友だちの意見が学級通信にのっていることについて、どう思いますか」というアンケートを配布した。「いいと思う」「すごい」「わかりやすい」など肯定的な意見は21名(87.5%)であった。他の意見として、6人分の意見しか載らなかったことに対して「ずるい」という回答が1名、名前がイニシャルだったことから「名前を普通に出して」など質問の意図と異なる回答が2名いた。肯定的に回答した記述では「いいと思う。理由は友達の意見をしることができるからいいと思った」「いいと思う。友だちの意見がのっていたら、自分もものっている人のよいことをまねをすることができるから」など、他の児童にも目を向けた意見であった。一方「ずるい 自分ものせてほしい」

など、周囲の児童に対する理解や仲間の良さに着目せず、意見が載った児童と載らなかった児童の意見に優劣があり、載った児童は優秀であるかのように捉えた児童もいた。この1号は授業を行った8日後に発行したため児童が授業内容を忘れており、授業内容に関わる仲間の気づきに着目せずに、自分の名前が出たか出なかったかという点のみに着目した児童がいたと考えられた。

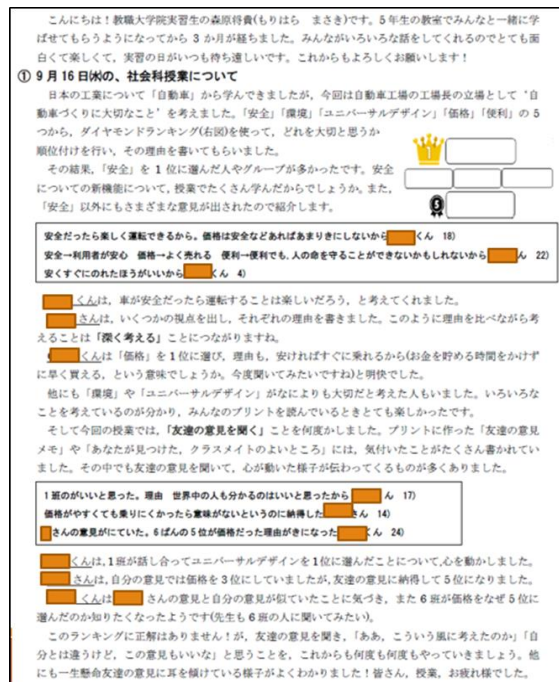


図2 発行した学級通信1号

2号は、前号と同様、社会科の授業内容を振り返りながら、児童の記述を学級通信で取り上げた。1号配布時のアンケート結果を踏まえ、1号とは異なり、名前の登場の有無ではなく内容に着目してほしいという筆者の願いから、児童の意見や記述を四角で囲わないことにした。また、授業で学習した語句を穴埋めにしてクイズにすることで、通信により親しみを持たせようとした。朝の会にて読む時間を7分ほど取り、児童らに読むよう促した。

3号では、社会科の授業で児童が記述した「まとめ」と授業を受けた「感想」を大きく取り上げた。前回までの1・2号で掲載されなかった児童の記述を掲載し、全員の記述が載るようにした。読み合う時間が取れず、配布したのみとなった。

(7) 実践の省察と課題

これまで学級で発行されていた通信と1・2号を比較すると、児童が学級通信を読む時間を設定したことが異なった。子ども同士の人間関係を育むために学級通信を用いるのであれば、学級通信を子どもたちに読んでもらう必要がある。今回実践を行った学級では、これまで学級通信を読む時間を設定していなかった。教師が学級通信をすぐに読むよう促すことで、いつもの通信との違いに目を向けさせ、学級通信を児童が読むことに繋がった。

しかし、学級通信の内容を振り返ると、少ない機会だからと多くのことを書いてしまい、文章量過多になっていた。多賀(2014)は「中身があれば、必ず読んでもらえるなどと思うのは、傲慢なアマチュアリズムです。プロの教師は、レイアウトを工夫するべき」と述べており、学級通信を子ども達が読みやすいものにする必要性を訴えている。今回の1・2号の読み合わせの際には読むのに時間がかかった児童が散見され、その原因の一つにはレイアウトの不備も考えられ、多賀の指摘するように「傲慢」な学級通信となった可能性を否定できない。

しかしそれよりも問題は、果たして「子ども同士の人間関係を育む」学級通信となったかということである。自分の名前が登場することに喜ぶ姿や、通信を読みながら「これは〇〇のことだ」などと話す姿も見られた。しかし、子ども同士の人間関係を育む目的を果たしていたかどうか、見取ることはできなかった。

このように筆者による学級通信の発行は、筆者の見取りでは子ども同士の人間関係を育むきっかけにはならなかったと考えられた。しかし先行研究において、先述の小板・赤坂に加え、例えば石井(2018)や神戸学力研「おもちゃばこ」(2014)では、学級通信が子ども同士の人間関係を育む方法として紹介されていた。

そこで、子ども同士の人間関係を育む学級通信についてどのような実践が行われているか、現職教員へのインタビューを行い明らか

にしようとした。

4. 教員への調査

(1) 調査日 2020年12月～2021年1月

(2) 調査対象

小学校の現職教員あるいは教職経験者6名

- ・A先生 女性 教師歴16～20年
- ・B先生 男性 教師歴5～10年
- ・C先生 男性 教師歴15～20年
- ・D先生 男性 教師歴10～15年
- ・E先生 男性 教師歴10～15年
- ・F先生 女性 教師歴5～10年

(3) 調査方法

対面もしくはZOOMによるビデオ会議により、約45分の半構造化面接を行った。質問は『子ども同士の間関係を育む』学級通信を発行されたご経験について、『子ども同士の間関係を育む』学級通信づくりに関する工夫、先生ご自身の学級通信の課題について』の2問とした。本研究の主題である「子ども同士の間関係を育む」ことに関わりのある発言内容を抽出し、テーマごとに見出しをつけ考察を行った。

(4) 調査結果

① 子ども同士の間関係を育む実践の工夫

○子ども同士の間関係が育まれる過程

子ども同士の間関係を育むためには、子どもはまず自分対先生。そこに私、先生、「あなた」が入ってくる。この三人称をどう作っていくかが、学級通信を発行する一つのねらい。視野を広げるために通信を使う。「隣の子はこういうこと頑張っているんだよ、この時にこんなことしてくれたよ」というのを教師が発信する。今まで見えてなかった視点が養われる。 B

僕たちってこういうことができているんだ、こういうことを大事にしている集団なんだって、っていう認識をさせることによって、保護者向けなんだけど、保護者から「あなたたちこういうことができているらしいじゃん」って。子どもが「先生って通信にも書いてくれるってことは本音なんだろうな、私たちができているんだ、じゃあ来週もうちょっと頑張ろうかな」って、そういうきっかけにしたいっていう思いもある。私たちはもっと頑張ろうって結果的に子どもたちの結びつき、人間関係が育まれる、かもしれない E

最初は教師と子どもの関係を育てることが目的だが、子ども達同士の関わりが増えるきっかけになる F

B先生、F先生は、まず教師と子どもの人間関係を育むために、次に子ども同士の関わりを増やしたり視野を広げたりするために、と、

このように子ども同士の間関係を育むために段階的に学級通信を用いていた。またE先生は学級通信を保護者向けに発行しているが、保護者から子どもにも影響が及び、子ども同士の間関係が育まれる可能性を示唆した。

○頻度

週一回発行 月一回とか出してもあんまり効果ないから、なるべくテンポよく出すためにも写真を D

頻度については本研究では各先生から詳しく聞いていないが、D先生は週1回でテンポよく発行することを意識し、そのために写真を活用していることが明らかになった。

○書き方

どんだん情報を、色んな方法で伝える C
自分の好きなことだから、半分休憩として手書きで学級通信づくりをしている。タイミング逃さない工夫でもある C
子どもに授業の中で指導する時に話すような語り口で書く D
写真は効果的で、写真からその子の良さを切り取ることできる E

C先生は手書きで学級通信の発行を行っていた。また多くの情報を「色んな方法で伝える」ことを意識していた。例えばC先生は、通信簿を学級の子どもたちに渡すときには子どもたちから先生への通信簿も記入させて、それを通信に掲載する実践を行った。またD先生は、授業時のような語り口で文を書いていた。E先生は、写真は一目でその子の良さが効果的に見て取れることに言及しており、実際にE先生の学級通信には写真が1号あたり2枚程度掲載されていた。

○学級通信の良さ

日直のスピーチを載せると、聴き取れなかった(子がいた)ら、もう一回文字で読める A
しゃべっても聞いていない子はいる。文字に起こすのはちゃんと見ている子のツールになっているのかな C
保護者が見るから、家庭・学校・子どもが繋がる C
親同士のトラブル予防 C

A先生とC先生は文字に起こすことで子どもたちが学級通信を見ればもう一度確認することができる点を学級通信の良さとして挙げた。またC先生は、家庭・学校・子どもが繋がることのできることを、また学級の様子を普段から学級通信で伝えることにより親同士のトラブル

ルの予防になる点を挙げた。

○学級通信の活用例

運動会の作文は、みんな黙って一生懸命走ったり踊ったりしたんだけど、みんなそれぞれ頭の中で色々考えていたことは違って、友だちからこのバトンをもらった時どういう風を感じたかとか、友だちが走っているときに何を感じていたかとかは誰も知らない。作文を読み合うことで「あ！君そういうこと考えてたのかよ」っていうのは、あったかなって思う A

友だちの発見とか気づきとか普段の生活を知って、読む時間を作る、線を引く、ふせんに返事を書く A

日記に親に対する反発が。「こんな文章書いてきてくれた仲間がいるんだけど」って学級の話し合いに。共感できる子どもがでてくる。そうだよなって話が白熱したりする。あ、なんだ私だけじゃないんだと思えることで、もうちょっとその友だちに話してみようとか C

例えば授業の発展的な問題を掲載して、あくまで学習内容と繋げて。学習が入り口でも良いわけでしょ。教材研究の一環として E

A先生は運動会の作文を読み合い、周りの子どもたちが知らなかったことに気付かせようとしていた。読む時間を作り、友だちの作文に線を引く、ふせんに返事を書くといった実践を行っていた。C先生は子どもの日記に親に対する反発が記されており、名前を伏せて学級通信に掲載し、話し合いの材料とした。日記に共感する仲間が現れ、書いた本人は共感してくれた友だちに話すきっかけとなったそうである。E先生は、学級通信に学習内容との繋がりを意識した問題を掲載し、それを解き合うことで子ども同士の人間関係が結びつくのでは、と提起をした。

② 子ども同士の人間関係を育む学級通信の課題

○発行での配慮事項

名前を書いて言うべきか気を付ける C
全員が同じくらい出場する(写真、感想など)っていう配慮が必要。不登校の子 D

配布物っていう性質から考えると、親が、あれうちの子のこと書かれんじゃん、うちの子のこと見てないの？ってなるとちょっと厄介かな D

掲載の基準は自分。親が「うちの子への頑張りっていうのに寄り添って欲しくないじゃん」ってなるリスク E
わざわざ活字にしてそこでしか保護者に読み取ってもらえないリスクをともなった通信で伝える必要があるのだから僕はポイントだと思っていて E

配慮事項として、C先生は名前を出すこと、D先生は学級の子ども全員が同じくらい登場することや親がどう読むか考える必要がある

こと、E先生は学級通信に教師である自分の価値観が入ってしまうことやそれらを文字に起こすことがリスクとなることを懸念し、配慮事項として挙げた。

○学校環境

年々やらなくなっている学級、先生たち。書く人が減るとやりづらくなる。若い人がやるようになればいい C
生徒指導上大変な年があり、途中で出せなくなった F

C先生の実感として、学級通信を書く人が減ってきており、発行しづらくなった。またF先生は、生徒指導上困難な年に、学級通信の執筆をやめた。

○子どもの個人名を出すことについて

無いかなあ。直接言っちゃう。通信には書かないで、その日あったことはその日の帰りの会で、その子がこういうことしてくれてたんだよ、ありがとう、みたいな感じで紹介しちゃうかなあ A

「最近寒い季節になってきて、開け閉めが雑になってるんだけど、〇〇さん(名前は出さない)は必ず閉めてくれます」って感じてやる。 B

名前を書いて言うべきか気を付ける。何を伝えたいか考える。ダメな時には「あるクラスの仲間が」って書いたりする。「自分がいた学校の話です」 C

前の年までは名前を出していない。全員分いっぺんに載せるのはいい。同じくらい出場する配慮が必要 D

誰のとかじゃなくて、内容に注目させて、自分はどうなんだろうって振り返って、誰がこれできているんだろうって気になると思うから。「〇〇くん素晴らしい」ってやると、なんであいつだけってなる。内容だけ取り上げれば、これ誰なんだろう、見せてって。誰かってことに注目させないで、内容が素晴らしいかってよって。 E

名前を出して学級通信に載せることのリスク。教師の価値観が入り込む。保護者からの信頼の薄れ。子どもも順番を気にする。最後に名前が出てくる子はどう思うか。名前を出さなければ、そういうことにはならない E

C先生はその都度名前を書くべきか気を付けていた。またB先生は学級通信にて〇〇さん(ママ)は～、と記述しているが、学級通信を読む学級の子どもたちは、誰のことか、いつのことか分かるため「名前を出す必要が無かった」と話した。E先生は、意見が誰によって出されたものかではなくその内容に着目させたいこと、名前を出して載せることにより懸念が生じることから、名前を載せていなかった。このことは子ども同士の人間関係を育むために、必ずしも子どもの名前を出す必要がないことを示唆している。

③ 保護者への影響

今年は授業参観がなくて、親が学校に来られないから、親に学校の様子を伝えてあげようっていうのは一番ですかね A

学級通信を家族との会話のネタに B

後ろには親がいる。大事な子どもを預けているから、その子どもがどんなことやっているか知りたいはず。最近では親に学校のことももっともっと興味を持ってもらいたい C

人間関係っていろんな関係があるから、そういった意味では学級づくりは子ども同士を繋げるために自分ではやってきたつもりが、親同士とか家庭関係とかも僕は良くなったかなあって思いました C

子ども達がみんなに伝えるだけでなく保護者が見るから、家庭・学校・子どもが繋がれるところがいい C

親同士のトラブルの予防 学校での出来事を教えらる範囲で教えてあげたら、早めに対応できるかなと C

保護者への学級の様子の伝達手段が学級通信しかないから、家族にも読んでほしい。子どもが家族に言うのと違う F

A 先生、C 先生、F 先生は、学校や学級での様子を学級通信で伝えようとしていた。また B 先生のように学級通信を家庭での会話のきっかけにしてほしいという願いを持っている先生も見られた。掲載しきれなかったが、インタビューに応じたすべての先生が学級通信の保護者への影響について話をした。また、C 先生は学級で起きた出来事を書ける範囲で通信に掲載することで、親同士の思わぬトラブルの予防にもなるとした。

(5) 考察

小坂・赤坂(2017)や津田(1996)の事例にあったように、子ども同士の人間関係を育むことを意識して学級通信を発行していた教師から話を聴くことができた。子ども同士の人間関係が育まれる過程に過程において、最初に「縦の糸」にあたる子どもと教師の関係、次に「横の糸」にあたる子ども同士の人間関係を育むことを意識した教師の存在が明らかになった。これは、学級通信を発行する教師と子ども同士の人間関係を最初に育むことが重要であることを示している。

学級通信で子ども同士の人間関係を育むために、発行頻度を意識し、書き方を工夫していることがわかった。また活用例で取り上げたような実践が行われており、子ども同士の人間関係を育もうと工夫されていた。

しかし子ども同士の人間関係を育む学級通信を発行することの課題としては、学校の環

境やその先生が置かれている立場により、発行が困難になる場合があることが明らかになった。また配慮しなければならない事項として、公平さを意識すること、紙媒体で残ってしまうことへの意識、教師の価値観が入り込まないようにすること、などが挙げられた。

また、学級通信は保護者が目を通す性質のものであるため、今回インタビューに応じたすべての先生が、学級通信を発行する際、保護者への影響を意識していた。

保護者を含めた学級全体の人間関係の拡がりに関するものとして、調査結果には掲載しなかったが C 先生の事例があった。保護者が亡くなった児童の頑張っている姿を学級通信で取り上げることで、他の児童らや保護者が、この児童や児童の家庭に寄り添うきっかけとなったという。C 先生は、この1回の学級通信によって人間関係を育んだのではない。C 先生と児童、児童同士の人間関係を構築した後に、このようなデリケートな内容を学級通信に掲載することで、さらに保護者を含めた学級の人間関係をより強固にすることができたと考えられた。

これらのことから、学級通信を用いて子ども同士の人間関係を育む上で、保護者もそれに目を通すことについて意識する必要があると思われた。そして、子ども同士の人間関係を育むためには、子どもと教師の関係に加えて、保護者と教師の人間関係も学級通信を用いて育む必要性が示唆された。

本稿に掲載しきれなかったが、学級通信を発行するにあたり、教師の思いや発行目的を持っていることが明らかになった。また、それらが教師の個性となり、本章で紹介した実践に影響を与えていた。

5. まとめと今後の課題

ここまで、学級通信の発行を通して子ども同士の人間関係を育むことを追究した。学級通信を用いて、子ども同士の人間関係を育む先生の存在が明らかになった。また、「横の糸」にあたる子ども同士の人間関係を育むために

は、まず「縦の糸」にあたる子どもと教師の人間関係を育むことが重要である可能性が示唆された。また、子ども同士の間関係を育むために学級通信に子どもの名前を掲載する必要が無いことも示唆された。

学級通信を用いた場合に、保護者と教師の関係が良好になる可能性は成井(2011)などが、担任と保護者の信頼関係を強めることは益田(2017)などがそれぞれ既に明らかにしている。本研究では、学級通信を用いて子ども同士の人間関係を育むという目的においても、保護者と教師の人間関係を育む必要があるという示唆は新しいものだといえる。

課題として、学級通信を通じた人間関係の育みが非常に複雑である可能性があること、学級通信は人間関係構築の一部であり学級で行われている学級通信以外の取り組みが人間関係をより強固にしていた可能性にまでは論じきれなかったこと、実践では子ども同士の人間関係が育まれる様子が見取れなかったことなどが挙げられる。

謝辞

報告書の作成にあたり終始適切な助言を賜り、また実習では丁寧に指導して下さった神山久美先生を始め、実習校で丁寧に指導して下さった小学校の先生方、インタビューを快くお引き受け下さった6名の先生方、助言・ご指導下さった先生方に感謝いたします。

引用文献

福井将道(2018)「安心の中で子どもを育てる——子どもの相互理解を深める学級通信」『障害者問題研究』46(3),pp.218-223.
石井崇史(2018)「クラスの実態に合わせて学級通信をつくりかえる」,教育科学研究会編『教育』, 2018(4),pp.63-66.
笠原紀久恵(1998)『学校が好き 先生が好き——子どもの数だけ豊かさがある』国土社.
河村茂雄(2010)『日本の学級集団と学級経営——集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望』図書文化社.

木村学(2020)「学級通信の起源とその変遷——「日本作文の会」機関誌『作文と教育』の分析を中心に」『文京学院大学人間学部紀要』21,pp.135-142.

小坂篤史・赤坂真二(2017)「学級通信を介した友人関係の深まりに関する事例的研究——児童の良さを伝える学級通信に着目して」『上越教育大学教職大学院研究紀要』(5),pp.13-21.

神戸学力研「おもちゃばこ」(2014)『「学級通信」フル活用メソッド——保護者・子ども・学校を変える!』小学館.

益田亮英(2017)「学級通信は子ども・保護者との信頼関係構築のツールとなっているか——学級経営における学級通信の役割を考察する」『九州ルーテル学院大学紀要 visio』(47),pp.57-68.

成井信之(2011)「望ましい学級経営の具現化につながる学級通信の一考察」『奈良県立教育研究所平成23年度研究紀要・研究集録』pp.1-10.

理想教育財団(2018)『学校における各種通信の実態と教育効果に関する調査研究 最終報告書』pp.17・19・20・33・34.

佐藤正寿(2020)「学級通信の発行に関する教師の意識」『日本学級経営学会誌』(2),pp.9-12.

霜村三二(2018)「「愛のある手紙」として学級通信を書く」,教育科学研究会編『教育』2018(4),pp.59-62.

多賀一郎(2014)「2 通信で伝える子どもの思い——子どもと教師と家庭をつなぐ」『THE 学級通信』明治図書出版,pp.12-17.

津田八洲男(1996)『人間らしく育てたい』新読書社.

同上(2000)『津田八洲男教育実践著作集(第2巻)生活綴方実践論とその指導』津田八洲男教育実践著作集刊行委員会,pp.215-328.

吉岡三智子(2015)「生徒の相互理解を進める手立てとしての学級通信の可能性——個を結び、一体感のある学級づくりをめざして」『静岡大学教育実践高度化専攻成果報告書抄録集』(5),pp.97-102.